

教区だより

No.3 2 4

2015 1 0

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌



特集

戦後70年 —戦争体験者の声—

2・3

戦後70年特集として、石東組徳泉寺前住職の岡本^{おかもと}義夫^{よしお}氏と、山城第1組養蓮寺門徒の中本^{なかもと}実^{みのる}氏にお話を伺いました。

連載

《第17回》

親鸞 —時代を生きる—

たいら まさゆき
平 雅行 氏

4

今という時代 / 出会いの窓

5

教区の動き

6

京都教区教化レポート（出版小委員会）

7

特集 戦後七十年 — 戦争体験者の声 —

【岡本 義夫 氏】



ちは内地に帰れるから良いなあ」とつくづく言いました。「内地に帰っても、どうせ特攻隊で死ぬだけだ」と言うと、「同じ死ぬなら、せめて内地で死にたい」と言うのです。これには返す言葉がなくて弱りました。

○仲間の特攻

島根県・石東組徳泉寺前住職。大正十二年生まれ。昭和十八年に海軍入隊後、昭和二十年には特攻隊員として戦地を経験。

○入隊・マニラ引き上げ

師範学校時代、海軍に入れば大学卒業者はいきなり士官(将校)にしてくれるというのが魅力で、誰にも相談せず独断で海軍に志願することにしました。随分乱暴な話ですが、そのような雰囲気の時でした。

マニラ着任中に戦況が悪くなり、「特攻隊となるために日本に引き上げよ」という命令が出ました。そのときマニラに残る者は、「お前た

特攻命令の発表は簡単なもので、隊長が指揮

所に来て、黒板に出発時刻と「一番機、誰と誰と誰」と、搭乗する者の名前を書くだけです。

二番機、三番機、四番機も同じように名前を書くとき、何も言わずに黙って帰ってゆくのです。

それを見た隊員は、これも何も言わず、名前が書かれた者の親しい友達が二、三人黙って付いて行って黙々と身の回りの品を片づけてやるのです。そんな時何も言えるものではありません。

「俺が先か、貴様が先か」と言い合う仲の小林少尉のときは、私と他の二、三人で片づけてやりました。最後の晩に「何か食いたいのがあるか」と聞くと、「餅が食いたい」と言うので、餅のある農家を探し出し、食べさせること

になりました。しかし暫く眺めて、「どうも食べられない」と言うので、紙に包んでポケットに入れてやったのです。彼は恐らくそれをポケットに入れたまま死んでいったと思います。

特攻機は敵艦に突っ込む時に、「ツー」という音を発信します。その「ツー」が長ければ敵艦に体当たりしたということになります。小林少尉の場合は私が受話器を握っていましたが、かなり長く電波を出し続けていたので、突入成功と認められました。しかし、人間が死ぬ瞬間を確認するということは異様なものです。それでも当時は何の抵抗もなく、感傷などありませんでした。

○墜落と終戦

いよいよ今度は私の番です。遂に死ななければならぬ時が来たと改めて覚悟を固めていましたが、九州の基地間を編隊で移動中、味方機同士の接触事故がおき墜落します。二番機は火を吹いて落ちていき、我々の一番機は乗っていた五名中三名が亡くなりました。私は一年ばかり治療にかかり、その間に終戦を迎えました。

軍隊は仏も法も無い人殺しだけの生活です。あのまま戦死していれば、仏法のご縁は無いまままで今生を終わることになりました。不思議にも生きて帰ったので、仏法に値遇することができました。

【中本 実 氏】



山城第一組養蓮寺門徒。昭和三年生まれ。

○京都で生まれる

五人兄弟の長男として京都に生まれ、小学二年の時、父親が軍需産業大手の小松製作所の技術者として採用されたのを機に、父親の生まれ故郷である石川県小松市へ戻りました。小学生の頃は、勤労奉仕の一環として後に小松飛行場となる土地の整備を行いました。

○小松製作所で働く

国民学校高等科を終えた十四才の時、加賀にある小松製作所へ入所し、ブルドーザーなどを作っていました。東京や名古屋へ働きに出た同級生は、後の東京大空襲や名古屋大空襲で命を落とした者も多くいました。満蒙^{*}開拓団として旧満州国や内モンゴル地区へ入植した者もいました。満蒙への入植者送出は国策だったため、各郡・町村に強制的に割り当てがありました。

満蒙開拓だけには行きたくなかったので、早々に小松製作所への入所を決めました。

小松製作所はまるで軍隊のような所でした。午前中は軍事訓練をし、午後は旋盤工としての仕事がありました。軍人勅諭五カ条の暗誦から始まる軍事訓練は厳しく、当時、米軍が日本海岸から上陸するかもしれないと考えられており、上陸を阻止するための訓練として、鉄砲を持ちながら匍匐^{ほく}前進が繰り返されました。加賀では日露戦争で大活躍した陸軍第九師団が有名で、加賀の軍人はそのことに大変なプライドを持っていました。指導に来ていた教官たちも例外ではなく、「加賀の九師団の名誉にかけても働け。命を捧げよ。」という号令の元、殴る・蹴るは当たり前前の過酷な訓練が続きました。

○召集令状と陸軍入隊

昭和二十年六月、十七才の時、召集令状が来ました。その前年に徴兵年齢が満十七歳に引き下げられたためです。

陸軍入隊後の生活はまさに地獄でした。自分たちは兵隊ではなく「焚き付け（火を付けるための薪）に過ぎない」と言われ、そのように扱われました。人間扱いされなかったのです。銃も何も持たされず、壕の中へ爆弾を抱えて突っ込む自爆練習を繰り返させられました。少しでもミスすると容赦ない鉄拳制裁が待っていました。

ました。食事も満足に取ることができず、常に空腹で、川の水を飲んだりしながら凌ぎました。昭和二十年七月、壊滅的な被害を受けた福井空襲があり、堀に逃げ込んで亡くなった人の遺体の引き揚げ作業を行ったのが鮮烈な記憶として残っています。脱走しても逃げ場がないので、留まるしかありませんでした。このような生活に嫌な思いは当然ありましたが、お国のためという思いで何とかやっていました。

○終戦を迎える

終戦になったということは、しばらく気が付きませんでした。「日本が負けたらしい」という声が周囲から聞えてきて、ようやく知ることができました。

終戦後も二十歳過ぎまで小松製作所で働きました。京都に住む親戚の勧めもあり、二十代半ばで再び京都へ行き、跡取りのなかった製紙工場を継ぎました。今では孫もいますが、当時のことを思い出す度「地獄だった」と思います。戦争は二度とご免です。

^{*}満蒙開拓団

(編集・取材 出版小委員会)

満州事変後、各都道府県から中国東北部へ、国策で送り出された農業移民団。ソ連侵攻後過酷な状況に置かれ、多数の犠牲者と中国残留孤児を生む。

親鸞 —時代と生きる—

第17回



平 雅行

(大阪大学名誉教授 / 京都学園大学教授)

の弟子が「密通」したというのです。同年正月、それが発覚しました。

何があったのでしょうか。『愚管抄』は、次のように述べています。後鳥羽の御所の女房たちが、安樂を呼び寄せて専修念仏の教えを説き聞かせた。安樂は仲間を連れて行くようになり、夜まで滞在することもあった。こういうことで、安樂と住蓮が処刑された。

また『法然上人行状絵図』『尊卑分脈』は次のように記しています。安樂の六時礼讃の声明が評判となり、それを聞いた院の女房が後鳥羽の留守中に出家した。それが悪く伝わって、後鳥羽が激怒し二人を処刑した。

実際のところは「密通」というよりは、無断出家が発端のようですね。しかし、真実がどうであれ、この事件のあと「法然の弟子は、念仏を口実に貴族の妻や娘を籠絡している」という悪評が流布します。後鳥羽院にもそのように伝わったのでしょうか。

後鳥羽はこれまで、道心の念仏者というところで法然たちを庇ってききました。ところが実際は、「女性を拐かすために念仏を利用した」とんでもない連中だ。だまされた」ということで、怒りが爆発したのでしょうか。

建永二年(一二〇七)二月の法難で法然・親鸞ら六名が流罪、そして安樂・住蓮・善綽・性願の四名が死罪となりました。彼ら四名が死罪になったことは、新出史料によって確定した、と前回述べました。

では、彼らはなぜ死罪となったのでしょうか。もともと後鳥羽院は、専修念仏の弾圧に乗り気でなかった。興福寺は執拗に弾圧を求めましたが、後鳥羽はそれを無視します。こうして問題が収まろうとしていたのですが、その矢先に、事態を一変させる事件がおきます。熊野詣の留守中に、後鳥羽の女房と法然

は、善綽と性願はなぜ死罪になったのでしょうか。彼らは事蹟がほとんど明らかでない無名の念仏者でして、興福寺の処罰要求の中にも彼らの名が入っていません。しかも『愚管抄』は、安樂が仲間を連れて行ったと記しています。善綽と性願も安樂の友人で、彼らも「密通事件」が原因で処刑されたと考えてよいでしょう。つまり建永の法難(承元の法難)での死罪とは、「密通」処分だったのです。

大切なことが、もう一つあります。この死罪は、正式の手続きを踏んだものではなく、後鳥羽の私刑でした。朝廷では保元の乱(一一五六年)で死罪が復活しますが、その直後に平治の乱(一一五九年)が起きます。そのため、死刑は治安維持に逆効果だという考えが広まっていて、鎌倉初期の朝廷では、正式の手続きをして死刑を実施するのは、ほぼ不可能な状況にありました。そこで後鳥羽は、自分の部下に命じて安樂らを殺させたのです。もちろん私刑は法律違反です。でも、絶対権力者の違犯を咎める者などいません。

こうして処刑が実行されました。法然・親鸞は朝廷の正式手続きを経て流罪となりました。でも、その十日以上前に、安樂らは後鳥羽の側近によって私的に殺害されたのです。

今という時代

「子どもに対して、あきらめることが大事です」息子が通う障がい児療育園の保護者研修での園長先生の言葉だ。一瞬「えっ」と思ったが、その言葉に続けて、『あきらめる』とは宗教語で、明らかにして極めることなのです」と言われた。

これまでの「これができるようになれば」という上昇志向の考え方から、「まあいいか」と価値観を転換し、その子がいる世界の価値観を「明らか」にして、その世界で輝けるように応援していくことが「極める」ということだと説明して下さった。また、「その価値観の転換をなるべく早くすると楽になる」とも言われていた。

その後調べてみると、「あきらめる」とは「諦める」と書いて、もともと仏教語であるらしい。「諦」は、仏教では明らかにするという意味や道理・真理という意味がある。現在一般的に使われる「あきらめる」は、かなえない物事を仕方なく断念することを意味する。それに対して仏教語としての「諦める」は、かなえられない道理をはっきり知ることによって、かなえない思いそのものから離れるということだろうか。

息子が通う療育園は職員の皆さんはもとよ

り、保護者も一緒になって熱意ある取り組みがなされている。その取り組みは一人一人の緻密な療育計画に始まり、多様なあそびや趣向をこらした節目ごとの行事、手作り給食、園外では行政への要求にまで及ぶ。一年ほど前にこの療育園に通い始めたとき、初めはその熱意の高さにとまどうこともあった。それらの取り組みが、「少しでもよりよい発達段階へ」という上昇志向第一の考え方に思えたからだ。だから、冒頭の園長先生の言葉を聞いてホッとしたのだった。障がい児療育等、人間のいのちと関わる現場をつきつめていくと、結局は自分自身の価値観が問題となり、「価値観の転換」ということでしか解決がつかないことに行きあたるのではないかと感じた。

あっさりと言われることに驚きもした。そんな簡単に「価値観の転換」というのはできるのだろうか。「まあいいか」と思つて、100パーセント自分の息子のあり方を受容することなど、私にはできていない。受容したと思つても、また新たな事態がおこっては崩れ、おこっては崩れのくり返しで受容しきるといふことはなく、おそらく生涯受容が続くのだろうと妻といつも話している。おそらくその課題は園長先生をはじめ、療育に携わる人なら誰でも感じておられるだろう。「諦める」や「受容する」と「諦めきる」「受容しきる」との間にはどうしても越えられないものがあるように思う。

しかしそんなことどつちでも良いとも言つように、息子が今日も通う療育園はエネルギーッシュであたたかい。

(編集委員 岡本 大志)

出 会 い の 窓



世界一の紙芝居屋って何？と手にした一冊。まあ中身はよくある、心にグサツと突き刺さる、私の欠点を全て言い当てるような熱い人生訓が詰まった本です。

この“ヤッサン”こと安野さん、紙芝居一筋40年、夢は紙芝居でノーベル平和賞と壮大。海外“口”演も成功させ、TVにも出たりとパワフル。京都国際マンガミュージアムでも常設でヤッサン口演があり、凄いと宣伝されていたものの、当時の私は紙芝居に対して懐かしさの思い出も無く、今どき時代遅れ、とあまり良い印象を持っていなかったのでスルーしてしまいました。

ヤッサンの人生や筆者の出会いを知って、生で観るチャンスが自分から逃したんだなあ感が大きい。3年前に亡くなられて、今ならパソコンで探せば観られるだろうが、やはりライブ感、力を感じることは無理だろう。この笑顔、どんだけ楽しかったんやろう。

(編集委員・横田 典)

『世界一の紙芝居屋ヤッサンの教え』(安野侑志／高田真理 ダイヤモンド社)

京都教区の動き

教区教師試験検定準備学習会

七月二十七日(月)から八月二日(日)の一週間にわたり教区会館において開催された。今回は北海道教区から大阪教区まで、二十四名(京都教区内八名)の参加者があり、例年になく猛暑の中、声明作法(泉康夫本廟部堂衆)、仏教学(采翠晃大谷大学准教授)、真宗学・教化(平原晃宗大谷大学非常勤講師)、法規(石井正道本山総務部主事)の五科目を学び、八月四日(火)・五日(水)に本山で実施された夏期教師試験検定に臨まれた。

(前駐在教導 崎田)

第五十八回児童大会

八月十九日(水)から八月二十一日(金)の二泊三日で、真宗本廟(東本願寺)と比叡山延暦寺を会場に、青少幼年研修小委員会主催の「第五十八回児童大会」が開催され、四十四名の児童の



参加があった。

それぞれが少し緊張した面持ちの中、教区会館大講堂で開会式が行われた。その後、真宗本廟へ移動し、両堂参拝、宝探しゲームを白洲で行った。最初の緊張した様子はすっかりなくなり、白洲を駆け回りながら、班で協力しつつ謎解きを楽しむ姿がそこにはあった。夜は、高倉会館でバーベキュー。一日の疲れを感じさせない元気な声が響いていた。

二日目、バスで比叡山の東塔・横川地域へ移動し、諸堂を巡った。通常は入る事が出来ない法華総持院東塔の内陣拝観は、子どもたちにとっても貴重な体験となった。夜はあいにく雨



にみまわれ、しんらん交流館での室内キャンプファイアーとなったが、一つのランタンを囲み大いに盛り上がった。最終日は、色紙交換と輪切りにした竹でループタイを作成。一人一人の個性が輝いた作品ができた。

晨朝法話で次のようなお話があった。「多数を表すとき『みんな』という数になってしまっている。数というものに振り回され、一

つの『いのち』が見えなくなってしまう。『一』というかけがえのない一人を見失っている。」と。「みんな」という数字ではなくて、そこに一人一人の存在の重さがあるという事。今一度、一人と出会うという事の大切さを教えられた児童大会であった。

(青少幼年研修小委員会委員 増田 義弘)

岡崎別院清掃奉仕・BBQ懇親会

去る九月三日(木)、京都教区仏教青年会の呼び掛けにより、親鸞聖人の若き日の草庵跡の御旧蹟である岡崎別院に於いて、清掃奉仕とBBQ(バーベキュー)懇親会が行われました。

サポートの山城第一組仏教青年会の皆さんや、教区仏青会員、崇敬寺院、門徒会、別院の三日講の方など多数のご参加を頂きました。

当初は境内の雑草引きなどの清掃と庭園での懇親会の予定でしたが、当日は秋雨前線の停滞のため雨模様となり、急遽屋内の書院や廊下の拭き掃除(お内仏のお磨きも!)に変更されました。

引き続き書院で行われたBBQ懇親会も四十名を超える賑わいで、お互いに親交を深めるひと時が持たれました。

(仏教青年会会長 佐々木 淳)

京都教区教化レポート

【出版小委員会】

出版小委員会の主な活動は、月に一度の教区教化広報誌である「教区だより」の編集会議です。原稿の依頼、取材や原稿執筆、原稿の校正作業、それらをもとにした誌面編集と、限られた時間と人員の中での活動となります。

小説『舟を編む』の中で、「大渡海」という国語辞典の編集者の仕事を描かれています。それは言葉を集め、吟味し、表現することで、今を生きている人たちに向けた辞書を作るといふもの。

「ひとは言葉の海を渡り、自分の気持ちを的確に表す言葉を探す。その広大な海を渡ろうとする人たちに捧げる辞書である」

その海を渡る舟を編んでいくのが編集者の仕事なのだ。言葉に囲まれ、言葉を使って生きる私にとって、月に一度の編集会議の時間は言葉と向き合う、大切に大変な時間となっています。

今年度より、「教区御遠忌記念事業」が宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年お待ち受け事業としてスタートします。当誌面においても丁寧にお伝えし、それぞれが教へと向き合えるような誌面作りを心掛けていきたいと思えます。

(出版小委員会主査 藤川 秀行)

事務連絡

《退職任命》

二〇一五年八月二十八日付

山城第一組

乗誓寺

川口 観正

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

〔届出順〕

丹波第三組

永領寺前住職

廣瀬 紀夫

二〇一五年七月三十一日

近江第二十六組

徳正寺前住職

二〇一五年八月九日

佐々木

孝純

二〇一五年八月十八日

近江第五組

西福寺坊守

二〇一五年八月十八日

畑中

麻美子

二〇一五年八月十八日

近江第三組

永願寺前坊守

二〇一五年七月二十二日

竹村

ささ能

二〇一五年四月十八日

石西組

西蔵寺坊守

二〇一五年八月十二日

山城第一組

即現寺前坊守

二〇一五年七月二十八日

近江第四組

法蔵寺住職

二〇一五年七月二十八日

相馬

學

八十歳

〔敬称略〕

〔敬称略〕

《東本願寺出版部刊行物のお知らせ》

『報恩講(2015年版)』



価格 一冊60円

報恩講にあたって、一人ひとりが自らの生活を振り返り、親鸞聖人の教えの意義を確かめる。

毎年、内容や趣きを変えて発行する小冊子。

《教務所員異動のお知らせ》

九月一日付けで、崎田真人駐在教導が宗務所研修部へ書記として異動となりました。同日付けで、宗務所研修部から梅溪真人補導が京都教務所へ駐在教導として異動となりました。

《お詫びと訂正》

『教区だより』九月号「京都教区の動き」掲載欄において、「保護司・教誨師合同研修会」の記事内に複数箇所「更正」という文言が使用されておりましたが、正しくは「更生」でした。ここにお詫びいたしますとともに、訂正させていただきます。

■ 京都教区教化テーマ ■

今のいのちがあなたを生きている
命に感謝 いのちの声 感謝のいのちのめぐり

◆ 教区事業予定

10月 5日(月)	13:30~17:00	出版小委員会	会場◇教区会館3F	会議室
10月13日(火)	14:00~	育成員等研修小委員会	会場◇教区会館3F	研修室
10月14日(水)	13:30~15:30	財政委員会専門部会	会場◇教区会館3F	研修室

◆ 地区・団体事業予定

10月 1日(木)	9:30~16:00	教区坊守会常任委員会	会場◇教区会館3F	研修室
10月 2日(金)	16:00~18:00	准堂衆会	会場◇教区会館3F	会議室
	15:00~17:00	大津別院清掃奉仕(仏教青年会)	会場◇大津別院	
10月 5日(月)	16:00~18:00	准堂衆会	会場◇教区会館3F	研修室
10月 9日(金)	13:30~17:00	教区合唱団	会場◇教区会館2F	大講堂
10月14日(水)	18:00~20:00	声明会	会場◇教区会館3F	研修室
10月19日(月)	14:00~17:00	教区保護司会役員会	会場◇教区会館3F	会議室
10月28日(水)	18:00~20:00	声明会	会場◇教区会館3F	研修室

「掲示板」

人見るもよし 人見ざるもよし 我は咲くなり

—— 武者小路実篤 ——

「教区だより」第324号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

発行日 2015(平成27)年10月1日
 発行人 磯野恵昭(真宗大谷派京都教務所長)
 発行所 真宗大谷派京都教務所
 〒600-8164
 京都市下京区花屋町通烏丸西入
 Tel: 075(351)5260
 Fax: 075(351)5256
 メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp
 ホームページ: http://www.k-kyoku.net/

印刷所 (有) 寶印刷工業所

the editor's note

編集後記

戦後70年。10歳で戦争を経験した人も今年で80歳。70年前の記憶を生の声として聞くことが難しい時代になってきた。観念からうまれた論評よりも、身をもって経験した人の言葉には力がある。▼人が人として生きていくことを阻む戦争。「過去の出来事」ではなく、「未来の出来事」になりうるかもしれない今を生きていると感じる。▼しかしもうひとつ忘れるべきではないこと。それは日本では「戦後」だが、世界中いたるところでは紛争が現在進行形であり、今が「戦中」なのだ。

(編集委員・岡本大志)